

階層の 分析者

格差研究の第一人者であるブランコ・ミラノヴィッチの横顔を
ファイナンス・ディベロップメントのクリス・ヴェリシュが紹介する

共産主義のユーゴスラビアで育ったブランコ・ミラノヴィッチは1968年の抗議運動を目撃した。ベオグラード大学のキャンパスを学生たちが占拠して「赤いブルジョワを打倒せよ」という幕を掲げていたのだ。

ニューヨーク市立大学で現在、経済学を教えるミラノヴィッチは、こうした非難の矛先が自分の家族にも向けられているのかと思案したことを覚えている。彼の父は政府職員で、当時の多くの子どもたちとは違ってミラノヴィッチには自分用の寝室があり、名目上階層のない社会でこれは特権を意味していた。彼の記憶に残っているのは主に、その夏、赤いカール・マルクスのバッジをこれ見よがしに着けている学生を見つめながら、友人たちと大学キャンパスの外れを当てもなく歩いていたときに感じた高揚感である。

ある取材でミラノヴィッチは「抗議の社会的側面や政治的側面が私に明らかになったのは後日になってからでした」と語っている。それでも、彼曰く自身の知的探求にとって「1968年は多くの点で分岐点だった」のであり、この転換期を経た研究活動を通じて後にミラノヴィッチは格差研究の第一人者として知られることになった。格差が経済学の世界で流行する何十年も前に、彼はベオグラード大学でこの問題に関する博士論文を執筆したのである。

今日、ミラノヴィッチは1988年から2008年までの世界的な所得格差に関する画期的な研究で最もよく知られている。この研究対象となった期間は、ヨーロッパにおける共産主義終焉の始まりを意味したベルリンの壁の崩壊から、世界金融危機までの時期と概ね重なる。

2013年にミラノヴィッチがクリストフ・ラクナーとの共著で発表した論文では、その形が理由で「エレファントカーブ」として後に知られることになった図(次ページ参照)が示されている。ミラノヴィッチが「高度グローバリゼーション」期と呼ぶ20年間に飛躍的に増加した富が世界的に不平等に分配されたことをこの図は示している。アジアを中心に、発展途上国では中産階級の所得が劇的な伸びを見せた。世界で最も所得が多い1%である超富裕層も同様に所得が大きく伸びている。一方で、先進国の低中産階級は所得が停滞してきたのである。

エレファントカーブの力はそのシンプルさにある。先進国での中産階級が抱える本当に大きな不満の源を美しく簡潔に示しているのだ。こうした不満を背景に極左と極右のポピュリスト政党が台頭してきており、貿易障壁と移民制限を求める声が生じてきている。

ベストセラーとなった『21世紀の資本』の著者であるトマス・ピケティは「ブランコは世界の格差研究に絶大な影響を残しました。特にエレファントカーブの発見の影響は大きなものです。その後の研究を方向づけました」と語る。ピケティと協力者による2018年の研究では、ミラノヴィッチの発見を支持する結果

が出ている。この研究では、1980年から2016年までに世界で最も豊かな1%の人々が下位50%の2倍もの利益を経済成長から得てきたことが判明している。

ミラノヴィッチの発見についてピケティは「当初の内容よりもさらに驚くべきものであるように思えます。象はマンモスのように見えるのです」と語っている。

長きにわたって経済学者は格差の研究を見下してきていた。自己の厚生を最大化する衝動以外の性質を持たない合理的経済人という架空の存在を前提とした理論的な世界に多くの経済学者が生きていた。人々の間の、また集団間の違いは無関係だったのである。多様性も無関係であった。重要なのは平均のみだったのだ。

この合理的行為者の世界では、需要と供給の力が社会全体の厚生を最大化するかたちで財・資本・労働力の価格と量を決定する魔法をかけることになっており、富や所得の分配はこうした想定とつじつまが合わず、単に市場の力の副産物であったのだ。

「市場がすべてを解決するはずなので、格差の問題は経済学の主流になりきらなかったのです。今も経済学の完全な本流にはなっていないでしょう」とミラノヴィッチは話す。

その後、2008年に世界金融危機が起り、所得の上位1%や5%が中間層を凌駕するスピードで所得を増やしたという認識が高まったとも彼は語る。

また、格差研究は爆発的に増えるデータの力を借りて発展してきた。強力なコンピューターさえあれば誰でも大量のデータからパターンを見つけ出すことができ、消費者や労働者の匿名の大規模集団を共通の特徴に基づいてグループ分けすることが簡単になる。「ビッグデータのおかげで多様性を取り扱う研究が可能になりますが、格差と言えば当然多様性が避けられません」とミラノヴィッチは話す。

ミラノヴィッチは常にデータに情熱を注いできた一方で、社会階層にも興味を持ってきた。社会階層に対する関心が花開くことになったのは、高校時代を過ごしたベルギーのブリュッセルだった。経済学者であったミラノヴィッチの父が当時の欧州経済共同体にユーゴスラビアから特使として派遣されることになったのである。

「ベルギーの高校は、フランスも同じだったかと思うのですが、マルクス主義的な色彩が強かったのです」とミラノヴィッチは語る。

ミラノヴィッチの同級生たちは1960年代後半から1970年代前半までの学生運動に影響された左派的な子どもたちと「ブルジョワ」の子どもたちに分かれた。ユーゴスラビア政府は表向き労働者の政府であり、この政府を代表する外交官の恵まれた子どもだった若き日のブランコはこのふたつのグループのいずれにもぴったりとはまることができなかった。彼は「本当に特殊な状況だったのです」と話している。

ベオグラード大学では当初、ミラノヴィッチの関心は哲学に向いていたが、経済学の方が実用的だろう

と決めた。また、経済学を選ぶと、統計学と社会階層への関心も組み合わせることができた。

ミラノヴィッチは大学院での研究を経て、フロリダ州タラハシーにあるフロリダ州立大学に特別研究員として滞在することになった。フロリダでミラノヴィッチは山盛りになった安価な食品、おかわり無料のコーヒー、大きな車といったアメリカの豊かさに感銘を受けることになる。そして、その豊かさはあからさまな所得格差と人種差別と隣り合わせであった。

2年後、ユーゴスラビアの格差を取り上げた博士論文の研究を進めるためにミラノヴィッチはベオグラードに戻っていた。この研究はユーゴスラビア連邦統計局で働いていた友人が提供した貴重な世帯調査のデータを使うものであった。

ユーゴスラビアのマルクス主義政権はミラノヴィッチの論文と、彼が共産党への参加を避けたことに眉をひそめたが、この論文が世界銀行調査局での20年にわたるキャリアの出発点となった。

「本当に、当時すでにブランコは所得分配の分野を代表する専門家のひとりでした」と東欧旧共産圏の市場経済への移行を研究する小さなチームにミラ

ノヴィッチを採用したアラン・ゲルブは語る。ミラノヴィッチは貧困と所得分配の問題に注力した。

世界銀行が収集する豊富なデータは貴重なリソースであり、ミラノヴィッチはこのデータにひらめきを得て格差の国際比較を行ったが、これは当時、斬新であった。1995年のある日、ミラノヴィッチは新しく部署を率いることになっていたゲルブの後任と話をしていた。

「突然、このアイデアを思いついたのです。世界中から集めたデータを、国ごとの調査には使っていても、ひとつにまとめていなかったのです」と語るミラノヴィッチは世帯調査に基づいて世界の所得分配を初めて調査した結果を4年後に発表することになった。

その後、ミラノヴィッチは多岐にわたる研究を数多く発表してきた。旧共産圏に関する研究に代わって、格差についても探求を続け、格差とグローバリゼーションの関係を問い続けてきた。彼が執筆した論文や書籍は歴史、文学、スポーツなど多方面に及ぶ彼の興味関心を示している。

ある論文でミラノヴィッチは西暦1000年におけるビザンツ帝国の平均所得と格差水準を推計している。彼が書いた別の論文では、ミラノヴィッチが最もグローバル化したスポーツだと呼んでいるサッカーに見られる労働移動と格差の関係性が取り上げられている。

プロサッカー界では格差が非常に大きなものになったことをミラノヴィッチは発見した。というのも、10チーム強の欧州トップクラブが世界で最も優秀な選手を獲得する資金力を持っているからである。その一方で、サッカー選手の自由な移動によって、国代表チーム間の格差は解消が進んでいる。その理由だが、小国の選手もトップクラブで技能を磨き、母国に戻って国代表チームの一員として競技に参加できるためである。

ミラノヴィッチの妻であるミシェル・デネバースは世界開発センター (Center for Global Development) で気候変動ファイナンスの専門家を務めているが、彼女と文学について会話したことがきっかけとなって、ミラノヴィッチはジェーン・オースティンの『高慢と偏見』について型破りな分析を執筆することになった。『高慢と偏見』が愛についてと同じくらいお金についての本であるとミラノヴィッチは主張しながら、様々な登場人物の所得を試算し、本の主人公であるエリザベス・ベネットの夫選別に富がどのように影響したのかを考察している。

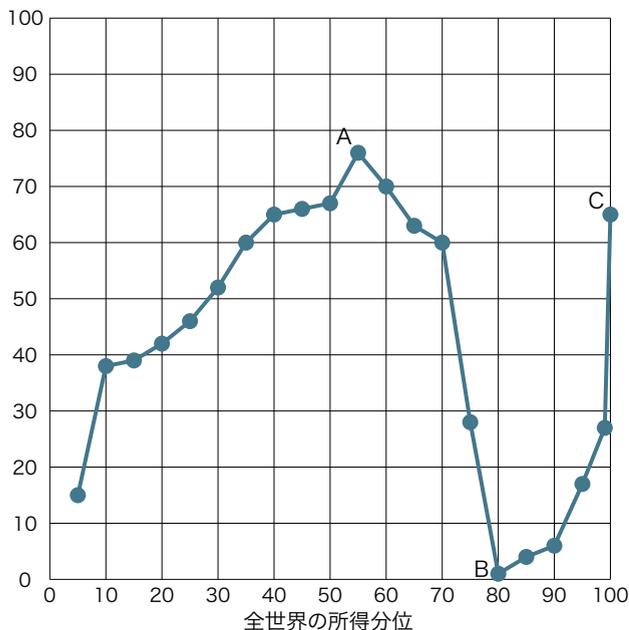
ミラノヴィッチは同じ分析をレフ・トルストイの『安娜・カレーニナ』についても行った。これら2点の考察は2011年に刊行された彼の書籍 (邦訳:『不平等について 経済学と統計が語る26の話』) の中に収められている。

もう1冊の『大不平等 エレファントカーブが予測する未来』は、産業革命以後の国内格差、国際格差

分配の不平等

1988年から2008年までに所得が最も増えたのは全世界の所得分位で第50分位前後に位置する人々(図中のA点)と最富裕層の1%(C点)であった。その一方で、所得の伸びが最も小さかったのが全世界の所得分位で第80分位前後の人々(B点)であり、こうした人々の大半は先進国の低中産階級であった。

(購買力平価ベースの実質賃金増加率(%))



出所: ブランコ・ミラノヴィッチ

に関するミラノヴィッチの研究をまとめており、ひとつの節目となっている。

資本主義において格差は否応なく拡大すると主張するピケティとは対照的に、ミラノヴィッチは格差が「悪性の力」「良性の力」と呼ぶことにした力の影響下で波のように動いているか、周期的な動きを見せていると考えている。先進国においては、所得格差は19世紀と20世紀前半に拡大したものの、その後、戦争とハイパーインフレという悪性の力が富を破壊することで格差が縮小した。第二次世界大戦後には、累進課税や力を強めた労働組合、教育機会の拡大という良性の力によって、格差解消が進んだ。

ベルリンの壁の崩壊が重要な分岐点となった。旧ソビエト諸国が世界経済に組み入れられるようになったと同時に、中国が扉を開き始めていた。発展途上国の急速な経済成長に伴って国際格差が縮小する一方で、先進国では中間層の所得が停滞する中、富裕層が経済的な成功を収め、国内格差が拡大した。

今後についてはどうだろうか。アジアを中心に発展途上国の多くは未来が明るそうだ。こうした国々は今後もさらに豊かな国々に追いつくことになるだろう。その一方で先進国の見通しはより暗いものとなっている。

先進国ではグローバル化と技術革新のふたつの力が中産階級を圧迫し続けることになるだろう。固定化した上流階級は高額な高等教育を受ける機会が増え、その恩恵に浴することになり、その上、自分たちに有利な税制など各種「金持ち優遇」政策を成立させるために政治的影響力を行使していく。こうした背景の中で社会移動性は低下していくだろう。

所得格差が拡大するにつれて、社会的な緊張と政治的な衝突も増していくだろう。『大不平等 エレファントカーブが予測する未来』の原著が出版された2016年以降、イギリスのEU離脱やフランスで起こっている抗議運動といった現象が起きているが、こうした事態がこの未来予想を裏付けている。ミラノヴィッチはこうした摩擦によって民主主義と資本主義が「デカップリング(切り離し)」されてしまい、アメリカでは富裕層が政治を支配する金権政治につながり、ヨーロッパでは大衆迎合主義か自国民中心主義という結果がもたらされるのではないかと心配している。

格差に関しては過去10年に相当の議論がなされてきたものの、ミラノヴィッチは「何も本当に動いていないのです」と彼は話す。「基本的に格差が深刻化する方向に自動操縦で進んでいます。それでもまだ私はすべてをあきらめたわけではありません」

所得再分配が従来型の解決策だが、これは資本の移動性が理由で以前ほど上手く機能しないだろう。資本の移動性によって、富裕層はタックス・ヘイブンに所得を移せるのである。かわりに、政策は富や教育などの「賦存資源」を再分配することを目指

すべきである。施策例としては、相続税の増税、企業が労働者に株を分配するよう促す政策、教育に対する国家の支出増が挙げられるだろう。

ミラノヴィッチは「これを明日に実現することはできませんが、賦存資源が今日よりもより平等に分配されている資本主義の世界へと向かいたいという考えを私たちが持つべきだと思います」と語る。

また、ミラノヴィッチは厄介な問題である国家間格差についても取り上げている。彼の計算では、アメリカ人はアメリカに生まれたという理由だけで、収入が世界で最も貧しい国の人の93倍になる。これはミラノヴィッチが「市民権プレミアム」と呼ぶもので、貧しい国々に生まれた人々がより豊かな国での成功を夢見るために、移民圧力が生じることになる。

所得格差が拡大するにつれ、社会的な緊張と政治的な衝突も増していく。この未来予想をイギリスのEU離脱やフランスでの抗議運動が裏付けている。

移民を止めることは財や資本の移動を止めることと同じくらい実現不可能だとミラノヴィッチは主張している。しかし、先進国の市民に国境を開放するよう期待することも非現実的である。彼が考える解決策は、移民受入を拡大する一方で移民に完全な市民権を与えないことで、雇用を失った自国民に補償するために移民に税を課すことも可能性としてありうる。

現在取り組んでいる研究によって、ある意味でミラノヴィッチはユーゴスラビアに始まった道のりの出発点に立ち返ることになった。この研究は中華人民共和国の階層構造の中でも特に所得分布の上位5%を丹念に調べるものである。この研究は彼が次に発表する書籍「Capitalism, Alone」の一部になっており、この本でミラノヴィッチは中国独自の経済が発展してきており、先行する自由主義経済と共存していくことになるだろうと主張している。

格差研究はどこに向かっているのだろうか。ミラノヴィッチは新たなデータが使えるようになることで、ふたつの新しい方向性が出ていていると見ている。ひとつはピケティ流の富の格差である。もうひとつは世代間格差でハーバード大学のラジ・チュエティなどの経済学者がこれまでに詳細に研究している。

この2分野について、ミラノヴィッチは「若者たちの社会的な意識は高まっており、彼らにとって魅力的なのです」と語る。「同時に、若者たちは頭が切れ、難しいテーマに取り組みたいと思っています」とも彼は付け加える。「この点では、私はとても楽観的です」**FD**

クリス・ヴェリシュはファイナンス&ディベロップメントのスタッフ。